

書くことに囚われた人々

— アントニー・トロロープの『ある編集者の物語』 —

谷田 恵司

(平成 19 年 10 月 4 日受理)

Caught between the Pen and Paper: Anthony Trollope's *An Editor's Tales*

YATA, Keiji

(Received on October 4, 2007)

キーワード：語り手 短編小説 執筆 狂気 自伝

Key words : narrator, short story, writing, madness, autobiography

序

生涯に 47 冊の長編小説を書いたアントニー・トロロープ Anthony Trollope (1815—1882) は、概して長編作家と思われがちである。確かに長編は「バーセットシャー小説群」Barsetshire Novels や「パリサー小説群」Palliser Novels の二つの連作を初めとして優れた作品が多く、また読者層も英米を中心に幅広い。長編作品がしばしばテレビやラジオでドラマ化されていることから、その人気がうかがわれる。

しかし、この作家は長編小説だけを書いたわけではなく 42 編ほどの短編小説も残している。そこではトロロープの長編作家とはまた別の側面を見ることができる。「トロロープの才能の色彩豊かな多様性が最も明らかにするのは、彼の短編小説においてである」¹⁾という言葉は、彼の短編をある程度読んだ者なら十分うなずける発言である。

本論ではこうした彼の多彩な短編小説群の中でもとりわけ特異な位置をしめる短編連作集『ある編集者の物語』*An Editor's Tales* (1870) を取り上げてその魅力を探るとともに、この作品集を彼の創作活動の中でどのように位置づけることができるかを検討する。

1 短編小説作家としてのトロロープ

まず最初にトロロープの短編小説全体を概観し、『ある編集者の物語』がその作品群の中で占める位置を確認したい。この作家が生前に単行本として出版した短編集は刊行年順に以下の 5 冊である。

『諸国物語 第一集』 *Tales of All Countries*

1st Series (1861)

『諸国物語 第二集』 *Tales of All Countries*

2nd Series (1863)

『ロッタ・シュミット、その他の物語』

Lotta Schmidt and Other Stories (1867)

『ある編集者の物語』 *An Editor's Tales* (1870)

『フローマン夫人はなぜ値上げしたのか、

その他の物語』

Why Frau Frohmann Raised Her Prices

and Other Stories (1882)

トロロープの短編小説の全体的特徴として、前期の作品においては『諸国物語』というタイトルからも明らかのように、外国が舞台となった作品が多い。彼は郵政省の有能な官吏として、郵便に関する調査をしたり郵便物の取り扱いに関する取り決めを結ぶために、アメリカ、オーストラリア、エジプトなどさまざまな地方や国々へしばしば業務出張を行った。そうした旅行で訪れた地域を彼は短編小説の舞台として用いたのである。そもそも彼が短編小説を書き始めたのは、1859 年のアメリカ滞

在中にその雑誌 *Harper's New Monthly Magazine* のために短編小説を書いたときである。彼は異国で出会った外国人やその地で暮らすイギリス人たちを観察し、作品の中に登場させた。外国を旅行や商用で訪れた、あるいは外国で暮らしているイギリス人の悲哀や疎外感、現地人との意思疎通の困難によって生ずる悲喜劇などがトロローブの短編作品群の中で大きな位置を占める。また外国が舞台であってもイギリス人は登場せず、エキゾチックな異国で暮らす人々のドラマが中核をなす作品も多く見られる。短編小説全42編のうち、25編が外国が舞台となっている。

後期においては彼の短編は「旅行記的要素が減少し、より多様性を持つものとなった」²⁾と言われる。後期に至ると異国ものなくなっただけではないが、その比重は比較的小さくなり、舞台も人物もそして扱うテーマもきわめて多様な色彩を帯びている。

ストーン Donald D. Stone はその点を以下のように述べている。当初トロローブは郵便事業のための業務上の海外出張で得た素材を短編小説の中に用いた。しかしやがて彼は短編小説という形式をもっと幅広く用いるようになっていった。彼は短編中で、後に発展させて長編小説で用いることになるテーマを軽く扱ったり、または以前に用いたことがあってこれからも使うかもしれないテーマや出来事を様々に変化させたり、あるいは中期の長編小説では扱わなかったような大胆な素材を実験的に扱ったりしたのである。彼はいくつかの短編において「当時の長編小説にはすんなりと登場させることができなかつたような、非常に危険で熱情的な人物像を生み出している」³⁾とストーンは言う。そうした例外的な人物や状況がこの『ある編集者の物語』に見られる。

また、長編の場合には、登場人物の変貌や成長を長時間にわたって(物語内の時間的にも、作家の実時間としても)描き続けることができるが、短編の場合には、たいてい雑誌に一度に(あるいはここで取り上げるいくつかの短編のように2号に渡って)掲載されるだけである。そうしたより小さい時間的空間的スペースの中で読者の興味を捉えるには、ある程度多彩でエキセントリックな状況や人物像が必要であった。

こうした後期の多彩な作品群の中でも、ここで取り上げる『ある編集者の物語』はきわめて異色の、前期の旅行記的異国ものなどとまったく異なった傾向を持つ連作短編群である。

2 『ある編集者の物語』の成立過程

1866年に出版業者ジェームズ・ヴァーチャー James Virtue は月刊誌を出したいと考えてトロローブに編集を依頼した。ディッケンズの *Household Words* や *All the Year Round* さらにサッカレーの *Cornhill Magazine* の成功により、小説家が雑誌の編集者となることは、その雑誌の経済的成功や権威付けにつながると思われるようになっていたし、またトロローブはちょうどそのころ、郵政省勤めをやめたいが収入は減らしたくないと思っていた。こうしてトロローブは1867年10月に郵政省を退職し、同じ月に彼の編集のもとで雑誌『セント・ポールズ』*Saint Pauls* の創刊号が出版された。彼はそこに1869年10月から翌年5月まで6つの連作短編を連載した。その最初の短編が載ったとき彼はすでに約2年ほど『セント・ポールズ』の編集者としての経験をつんでいたことになる。また彼はその少し前にも、『フォートナイトリー・レビュー』*Fortnightly Review* の編集を、その編集長であるジョージ・ヘンリー・ルイス George Henry Lewes が不在のときに一時的ながら担当したことがある。そうした経験を素材にして、彼は編集者を語り手として、雑誌への原稿寄稿者たちを主な登場人物とする連作短編を書いたのである。ちなみに、トロローブはこうした連作短編はこれ一冊だけしか書いていない。それぞれの短編のタイトルと発表年月は以下のとおりである。それらは連載終了後1870年に一冊の単行本として出版された。単行本では雑誌掲載の順に6作品が配列されている。そのうち「パンジャンドラム」と「ぶち犬亭」の2つは2か月にわたって連載された。

- 「トルコ風呂」"The Turkish Bath" 1869年10月号
- 「メアリー・グリズリー」"Mary Gresley" 11月号
- 「ジョセフィン・ド・モンモレンシー」
"Josephine de Montmorenci" 12月号
- 「パンジャンドラム」"The Panjandrum"
1870年1月号, 2月号
- 「ぶち犬亭」"The Spotted Dog" 3月号, 4月号
- 「ブランビー夫人」"Mrs. Brumby" 5月号

3 具体的検討

トロローブ自身はこの作品集について『自伝』*An Autobiography* (1883) の中でこう語っている。「本書

で描かれているどの事件も、関係者に過去の出来事を思い出させるようなものはひとつもないものと思う。しかし、この本の中の出来事はみな、何らかの事実を回想して、それに基づいて大筋を作り上げたものなのである」⁴⁾

伝記的事実との関連はひとまず置いて、フィクションとしての連作短編集の特徴としては、ここでは作家的創造の過程そのものが題材となっているという点がまず第一にあげられる。

それまでの、旅といういわば非日常的な体験から素材を得て創作した多くの作品などの場合と比較して、ここではトロロープが自分自身の編集者・作家としての体験をもとに、編集者や作家志望者を登場人物とする物語を語っている。その作品は必然的に創作活動自体への作家の姿勢をも示すことになるはずである。その結果この作品集では、読者はトロロープという作家の創作活動を、作家志望者の人物像の中に埋め込まれた形で垣間見ることができるだろう。この作品集はそうした意味でメタフィクション的性格を強く持っていると言えよう。

トロロープは自分の創作活動について『自伝』中の良く知られた箇所以下のように語っている。それは、同じく『自伝』中で明らかにされた彼の「金銭上の成功」とあわせて、この作家の死後の評価を著しく低下させた原因の一つであるとされて来た。

それによるとまず彼は自ら規律をつくり、それにしがって執筆する。それは一定の機械的方法である。作家は原稿を一週間に平均約40ページ書く。それは20から時には112ページまで変動する。一ページには250単語書き入れる。そして毎朝、5時半に机につき、郵政省に出勤する前に3時間ほど働いた。まず彼は常に時計を前にして座り、最初30分間は前日に書いたものを読み、次に原稿1ページ250語を15分で書くようにした。それを2時間半やれば一日2500語となる。そうやって、年に10か月働けば、「三巻本の長編を年に3作ずつ毎年書けるだろう」⁵⁾というのである。

そして彼はいわゆる芸術家かたぎの作家が靈感を待つて創作することを軽蔑した。「そんなことは私に言わせれば、靴職人が靈感を待っていたり、ろうそく職人が蠟の溶ける神聖な瞬間を待つようなもので、実にばかげたことである」⁶⁾彼は、職人のように一定の速度で勤勉に決められた量の仕事をこなすことをよしとし、自分も一度も原稿の締め切りを破ったことはないと言い切る。

しかし、この連作に描かれる作家志望者たちは（一応「メアリー・グリズリー」と「ジョセフィン・ド・モンモレンシー」の主人公たちを除いては）そうした勤勉さからは程遠い、トロロープが軽蔑する、いわばものに憑かれたような人物ばかりである。作品を一つずつ検討してみよう。また、語り手に関して最初に述べておくと、この連作短編集は一人称複数形のいわゆる“editorial we”を用いて「我々」と自称する一人の編集者が語るという形式をとる。この点については後に詳しく検討する。

「トルコ風呂」

さて第一作の冒頭の場面は、ロンドンにあるトルコ風の蒸し風呂が舞台となる。イギリスではヴィクトリア朝後期にトルコ風呂が流行し、シフリン Malcolm R. Shifrin によれば、独立した施設だけでなくホテルや病院内のものなども含めると、イギリス全土で600以上のトルコ風呂が19世紀後半に設置され、そのうちロンドンには100以上があったそうである。⁷⁾

そうしたトルコ風呂の一つにたまたま出向いた編集者に、言葉巧みに近づいた男マイケル・モロイ Michael Molloy は一見紳士風で初対面を装っていたが、実は相手が編集者と知って近づき、自分の書いた原稿を雑誌に載せてもらおうとする意図を隠し持っていた。その原稿はまったく端にも棒にもかからないものであった。しかし、モロイは自分の書くものが掲載に値すると信じ込んでいる。編集者が最後にモロイの家に行ってみると、彼の妻は夫が狂人であると告げる。こうした、寄稿者の真の姿が最後に明らかになる、というプロットはこの作品集の他の作品にも見られる。

ここでは、仕事に疲れた勤め人がふと蒸し風呂に足を向けるという日常生活と、トルコ風呂というエキゾチックな閉ざされた非日常的の空間に潜む狂気とが、ほんの紙一重で接している。語り手の編集者は、蒸し風呂で初対面の男に話しかけられ、葉巻をもらい、裸の身体にタオルを巻いただけの姿で知識人同士の会話を楽しむ。狂人マイケル・モロイの狙いはもちろん性的なものではなく雑誌への掲載であるが、それでもここに性的な要素を読み取ることは可能である。ヴィクトリア朝のトルコ風呂という施設が当時のホモセクシュアルの男性にとってどのような役割を果たしていたかは想像に難くない。しかしこの作品ではそうした性的要素は、浴場におけるタオ

ルの使い方とか、椅子の硬さなどについての語り手のユーモラスな観察によって、蒸し風呂における裸体と同様に、実に巧妙に隠匿されている。さらには編集者と狂気の物書き志望者の間に、ホモソーシャルとも呼べるような、お互いへの直接的性的欲望を含まないながらもきわめて排他的な男性同士の強い絆を読み取ることもできよう。この二人の共通項は、執筆という創造行為である。この作品は次のように終わっている。なお、先に述べたように「我々」とは一人の語り手の自称である。

話が終わって彼のところに戻ると、微笑を浮かべて我々を迎えてくれた。「さようなら、モロイ」と言う。「ごきげんよう」と彼は答え、我々の手を握った。我々は彼をしげしげと眺めたが、これがトルコ風呂で隣に腰を下ろした男だとは到底信じることができなかった。

その後、彼は二度と我々を悩ますことはなく、編集部へも現れなかった。逆に、我々の方が彼をしげしげと訪れ、そのうちに同業者もそこに足を運んでいるのに気づいた。紙を都合してやったりもした。その紙を使って今でもほかの編集者のためにせっせと書いていることであろう。⁸⁾

執筆のための紙をあげることは創造行為の援助であり、編集者はモロイに雑誌への発表の場所を提供できなかった代わりに、執筆という行為そのものの道具を与えている。それは、編集者によるモロイの狂気への加担である。あるいは、加担と言うよりも取り込まれた、と見るべきかも知れない。心優しい編集者はもうすでにこの男に対して「慈悲心という名の舟形バターソース容器」から「中身を惜しげなく」(31)注いでしまったのだから。

作家トロロープにとっては上述のように執筆は靴の製作と同様の労働であり、靈感や狂気とはかけ離れたものであった。この物語ではモロイの狂気は執筆行為そのもの(あるいはそのパロディ)となって顕在化している。この点を「トロロープ自身の機械的な創作習慣のパロディである」⁹⁾とする見方があり、それは妥当な解釈であろう。しかし、もう少し深読みして、執筆という行為と狂気との近接性・相関性を一つのテーマとしてこの作品を読むことは可能であろうし、さらにそれをこの連作短編集全体のテーマの一つと見なすこともできよう。作家はこの連作で確かにもの書き志望の変人たちをユーモラス

に、皮肉っぽく描いてはいるが、そこにはものを書くという行為がいかに狂気に近いものであるかがうかがえる。彼は創作行為が『自伝』で言うほど機械的なものだと、実は決して思っていなかったのではないか。

「メアリー・グリズリー」

田舎町の医者の子メアリー・グリズリーは、父を失った後、小説家になろうとして母とともにロンドンに上京する。18歳の彼女は貧乏な牧師補と婚約している。ロンドンで彼女はやがて語り手の編集者と知り合いになり、彼の助けで小説を書き直す。編集者は30歳以上も年下のこの愛らしい娘を愛していると言うが、それはあくまでプラトニックな感情である。結局彼女はフィアンセの遺言で創作を断念し、やがて宣教師と結婚して異国へ渡る。

まず確認しなければならないのは、作家トロロープとケイト・フィールド Kate Field というアメリカ人女性の関係という伝記的事実である。『自伝』中でトロロープは以下のように述べている。

ある女性¹⁰⁾がいるのだが、その人について私の人生の回想録と称する本書の中でまったく触れないとしたら、それは私の後半生を彩ってくれた大きな喜びの一つを書き落とすことになるだろう。15年前から、彼女は私にとって家族以外では最も親愛なる友人であった。彼女は私の人生の光であり、その人のことを考えるだけでいつも生き返ったような気持ちになることができた。名前をここに記しても彼女は喜ばないだろうし、かえって人に迷惑をかけるかもしれない。しかし、あの女性のことにまったく触れないのは、ほとんど偽りということになるだろう。¹¹⁾

トロロープは1860年にフィレンツェの兄トム Thomas Adolphus Trollope の家でケイト・フィールドと出会った。彼女は1838年生まれであるから、1815年生まれの小説家より20歳以上年下である。彼はこの活発なアメリカ娘が大変気に入る、その後しばしばお互いを訪問し、手紙のやり取りをした。彼女は、作家、女優、女権運動家などとして英米両国で活発に活動したが、結局どの分野においても一流とまでは行かなかったようである。トロロープは彼女に小説の書き方のアドバイスをしたり、何度も結婚を勧めたりしている。この

女性は生涯独身ですごした。

こうした点を見ると確かに、この物語は「おそらくトロロープ自身のケイト・フィールドへの感情について、我々にかんがりのことを示すものである」¹²⁾とする見方は十分うなずける。また、この作品にはカラー・ベル Curren Bell (シャーロット・ブロンテ Charlotte Brontë) への言及も見られる。女性小説家、牧師補との結婚、宣教師と結婚してのアフリカ行きなどといった要素は、明らかにシャーロット・ブロンテ及び『ジェイン・エア』 *Jane Eyre* (1847) を意識していると思われる。

ヒロインのメアリーは、婚約者との死に際の約束に従って小説を書くことを断念する。いずれは本人の才能の乏しさそのものが彼女の執筆活動を終わらせることになったかもしれないが、執筆断念の直接の理由は婚約者の言葉である。牧師補がなぜ小説というものを良しとしなかったのか、その十分な説明はない。メアリーによれば、彼は小説を書くことを「神様のお与えくださった才能を間違った方向に使うことだ」(95)と見なしていた。執筆活動に生き甲斐と将来の希望を見出していた女性が、ここではそうした自己実現の場、自立の手段、自己表現の場を奪われたと見なすこともできる。経済的基盤のない若い女性の自立という問題を、シャーロット・ブロンテは『ジェイン・エア』ではマデイラの叔父からの遺産が突然転がり込むという形で解決した。しかしそれは現実的解決にはなりえない。「メアリー・グリズリー」の結末は『ジェイン・エア』のこの点でのご都合主義をトロロープ独特の皮肉な現実主義で書き直したものとと言えるだろう。

「ジョセフィン・ド・モンモレンシー」

ここに登場する作家志望者はポリリー Polly という名の身体障害者の女性であり、彼女はいかにも貴族的なジョセフィン・ド・モンモレンシーという筆名をあたかも本名であるかのように使って編集者に手紙を出し、自分の原稿を出版しようとする。そしてそこに彼女の美しい義理の姉やその夫などが絡み、一度は手紙でだまされたと思った編集者も結局は相手の意向を受けて出版社に取り次ぎ、そこから彼女の本が出版されて成功を収める。

トロロープはすでに身体障害者の女性としては『バーチェスター・タワーズ』 *Barchester Towers* (1857) で、足が不自由な女性ネローニ夫人 Signora Neroni をソファーに横たえて登場させている。しかし、ネローニ夫人は非常に美しく、男性を魅了する妖艶的な女性であり、自分の障害をいわば武器として用いて男性を操ろうとする点でジョセフィンことポリリーと

大きく異なっている。ポリリーは25歳ながら、その表情には「若さと老いとが混ざり合った痛ましさ」(137)があると描写されている。背骨がねじれて変形した肉体が優雅な筆名と交じり合い、病める肉体から噴出する言葉が、硬くこぼった身体と軽々と飛躍する想像力との同居を示す。ここでは精神と肉体、外見と中身、書く人と書かれるテキスト、ペンネームと本名などという、二項対立的で排他的でもありながら、かつまた互いに境界を接し、さらには明確な境界線すらありえない二つのものの関係が語られている。¹³⁾

「パンジャンドラム」

これは、雑誌を立ち上げようとした人々が、結局は意見が合わず創刊に失敗する話である。リチャード・マレン Richard Mullen はこの作品を高く評価し、次のように述べている。「『ある編集者の物語』として出版された6つの物語のうち、これは最も自伝的なものであり、トロロープを研究する者に最も多くのものを与えてくれる作品である」¹⁴⁾マレンは、この作品で描かれている人物にはそれぞれモデルがいたので、この短編はトロロープの実人生との関係においてきわめて興味深いと見る。しかし、この作品をあくまでフィクションとしてみた場合に面白いのは、雑誌創刊という事業にかかわる集団の力学や、創刊準備の会合に集う者たちそれぞれの性格の描写である。どのような事業を立ち上げる際にも発生するであろう、集団内の不毛な議論、誤解、足の引っ張り合い、自己欺瞞、ねたみなどが実に詳細に描かれている。

語り手は若い頃の編集者である。彼は創刊号に載せるためにみなそれぞれ書いてくることになった原稿が書けず、大変苦労する。こうした書けない悩み、不安、苦悩は、『自伝』によれば作家としてのトロロープには無縁のものであったようだが、ここでは実にリアルに提示されている。さらに興味深いのは、語り手のそうした行き詰まりを打破したのは、書けない苦しみにいたたまれなくなって出かけた公園でたまたま見かけた幼い少女の姿だったことである。雨の中を駆けるような足取りで進むその少女は一緒にいた召使らしき女性に「ねえ、アン、彼はどんな人でしょうね」(206)と話しかける。この一言を偶然耳にした語り手は次々と想像を膨らませ、やがてそれを素材に小説を書き上げる。これは作家に靈感が訪れた瞬間である。この場面はユーモラスに誇張して書かれてはいるが、作家がアイディアをどこから得て、ど

のようにしてそれを作品へと作り上げるかの過程を示すものであると言えよう。前述のように『自伝』ではあれほど靈感を待ち受けることを否定し、作家の仕事を靴職人の仕事にまでたとえたトロローブであるが、決して靈感そのものを否定していたわけではないと思える。

「ぶち犬亭」

この作品については、作家自身が「酔っ払いの学者の苦闘を描いた「ぶち犬亭」は、この連作中で最もよいものである」¹⁵⁾と『自伝』で語っている。また「しばしばトロローブの最高の短編作品であるとされる」と言われる。¹⁶⁾物語は編集者が受け取る一通の手紙から始まる。それはある落ちぶれた学者崩れの男からの求職の手紙で、差出人マッケンジーはきわめて率直に自分が大学教育を受けていながらも家からは勘当され、自分より家柄の低い妻と結婚して貧しい生活をしている、と告白している。編集者はこの男が連絡先として記してきた下町のパブ「ぶち犬亭」に赴き、彼の評判を確かめようとする。そこで編集者は、マッケンジーのよい面を信じて支えようとするパブの経営者夫妻と知り合う。編集者は彼のアルコール依存を恐れはしたが、結局ある素人学者の田舎牧師が書いた学術書の原稿の索引作成を依頼する。しかし当初はパブの2階の、経営者夫妻の寝室を借りてきちんと仕事を進めていたこの男は、妻が酔いつぶれて警察の世話になったことをきっかけにして自らも再びアルコールにおぼれる。最後には、泥酔した妻がその原稿を燃やしてしまい、絶望したマッケンジーは自らの命を絶つ。

実に悲惨な物語である。アルコール依存症の壮絶な描写は胸を打つ。語り手はマッケンジー夫婦が酔って暴れまわったと聞き「耳をふさぎたい思いだった。一人前の男が、それもあれほどの男が、大酒飲みの女と一緒に排水溝を転げまわるとは、自分でも泥酔し、そしてその女は妻なのだ」(301)と嘆く。こうしたアルコール依存の悲劇が、そのアルコールを客に飲ませることで生計を立てる夫婦の口から語られる。アルコール依存の壮絶な悲惨さとパブ経営者夫婦の人情の対比は、物語の人物造形の面白さであるとともに、アルコールを売る側と消費する側とが、一方は一直線に破滅へと向かい、もう一方は穏やかに幸せな家庭を営むという正反対の様相を見せている。

さらにまた、これはアルコール依存の悲劇であると同時に、階級落下の恐怖を扱った物語でもある。冒頭の手

紙で、マッケンジーはこう語る。

妻は由緒ある家柄の女ではありません。小生は、いわゆる「紳士」であるという因習的束縛を振り捨てようと決意し、下層の者たちの中で自由に生きるため、この女と結婚したのです。無論、小生の人生は失敗です。実のところ、そもそも生きるとは、まことに愚かなことではありませんか(236-237)。

なぜ自分より下の社会階級の妻と結婚することが、自分の属していた階級の因習的束縛を捨てて自由になることにつながるのか。それは単なる言い訳であって、実は自分自身の傲慢さやアルコール依存などの理由で、大学は追放され家を勘当され、やがて無教養な女と結婚せざるを得ない状況になり、結局は社会階級を落下しただけではないのか。サザーランドはこの作品を「階級落下」つまり、ミドル・クラスのまっとうな地位から「下層の者たち」の住む恐ろしい深遠に落ちることへの恐怖を描いたものである」¹⁷⁾と見る。

トロローブ自身、幼年時代に父親の没落により家庭の経済事情が極端に悪化し、転校や夜逃げのような海外生活を余儀なくされた経験を持つ。サザーランドは作品中のマッケンジーが飲んだくれて死んだように眠っている描写を示し、こう述べる。

この物語を知らない人にこの描写を読ませたとしても、誰もトロローブという名前をすぐに思い浮かべはしないだろう。しかしながら、ここにトロローブが病的なまでに仕事をし続けなければならなかった根本的理由がある。この汚濁の中に横たわっていたのはトロローブ自身なのだ。彼がここに見るのは1841年にアイルランドに行かず、人生をやり直さなかった自分自身の姿なのだ。¹⁸⁾

サザーランドの言うことはたしかに面白い。しかし「汚濁の中に横たわっていたのはトロローブ自身なのだ」ととまで言うのはややドラマチックに過ぎないだろうか。三つ子の魂百までと言うように、幼年時代の悲惨な記憶はいつまでも残り、転落の不安は一生消えなかっただろう。しかし、それだけが彼をあのような旺盛かつ機械的で「病的」とも呼べるほどの執筆活動へと、そして執筆による収入への強烈な執着へと駆り立てていたのだろう

か。現実には彼は郵政省で安定した仕事を持ち、一応普通のレベルで生きていくためには、あれほどせっせと書いて金を稼ぐ必要はなかったはずである。この短編は確かに自伝的な要素を持つ作品であるが、それは編集者としての経験をもとに寄稿者との交渉を材料に物語を作り上げたということである。作家トロロップの旺盛な創作意欲の一つの要因として経済的、社会的転落への不安があったであろうし、その意味で確かにマッケンジーという人物には作家の自画像的要素があるとは言えるだろう。しかし、彼の旺盛な創作活動の根本的要因として、創作そのものの持つ依存性、いわば書くこと自体の呪縛を見ることはできないだろうか。マッケンジーの自殺という結末は、そうした呪縛がいかに致命的なものになりうるかを示しているのだ。

この作品集に描かれた人物たちは、この短編に登場する素人学者の田舎牧師も含めて、そうした書くことの魔力、創造の呪縛に取り付かれた人々である。牧師の原稿にしても編集者が「これが最終的に出版されることになるかどうかという点に関しては、我々としても我々なりの疑念を抱いていた」(245)という程度のものである。それをなんとか出版しようとしていた牧師も、呪縛に取り付かれていた一人である。牧師は原稿が燃えた後、田舎から手紙でこう言うてくる。

この計画はあきらめようと決心いたしました。焼けてしまったものは元には戻せません。それに、あれは元に戻すだけの価値がないものかもしれません。私はもう年老いて今さら再び書き上げるのは不可能ですし、あの仕事はどう見ても私では力不足だったのだらうと思います。生まれてこなかった子供の遺灰のことはもう忘れるつもりです。(326)

彼は原稿が焼けてやっと呪縛から目が覚めた。しかし「価値がない」研究書の索引を作るという二重に空しい作業を行い、その索引すら完成できなかった男は、呪縛にとらわれたまま永遠に目覚めることはない。

こうした人間たちが奇妙な愛すべき変人たちのように描かれているのは、それが作家の自嘲的自画像でもあるからである。作家は自分が靴職人と同様の勤勉な専門職であることを自負するとともに、同時に自分が片時もペンと紙を手放せない、創作に取り憑かれた人間であることも十分認識していた。しかし、作中の人物たちとこの

作家の根本的な相違は、作家はその姿を客体化し距離をとって描くことができたという点である。

「ブランビー夫人」

ここで少し作品の配列について触れると、『ある編集者の物語』という作品集全体のタイトルは雑誌掲載時にすでに各短編のタイトルを総括するものとして掲げられていて、各短編は『ある編集者の物語』第1編「トルコ風呂」というような形で掲載された。そして、単行本化されたときも作品は雑誌掲載の順番そのままに配列された。

1980年前後に彼の短編が新たに全5巻の短編作品集として編集発行された。これは編者が各作品を内容によって新たに分類しなおした作品集である。この作品集第1巻『編集者と作家』*Editors and Writers* (1990)には『ある編集者の物語』に含まれる6作以外に、編集者や作家にかかわる2編が収録されているが、その編集に関しては批判がある。この作品集の書評は、まとまった連作短編集の中に、たとえ同じような題材を扱ったものでもその連作以外の別の作品を挿入し、さらにその連作そのものの順番を乱したりすることは「トロロップ自身による作品の順番や配列の意図を無視し、作品から作者が意図した効果を奪うことだ」¹⁹⁾と編者を強く非難している。この書評はさらに「トロロップがこの作品集で「トルコ風呂」と「ブランビー夫人」の生意気な物書き志望者たちの話を最初と最後に置いたのには、確かにそれなりの理由があるのだ」²⁰⁾と述べているが、その「理由」は述べられてはいない。ここでその理由を考えてみたい。

題名となっているブランビー夫人という人物は、語り手が「これまで編集者として出会った老若男女全ての人々のうちで、ブランビー夫人ほど不愉快で人に嫌われる人物はいなかった、と断言して差し支えない」(331)と言う程の強烈な女性である。これは凶暴なまでに自己中心的で攻撃的な女性が、善良で弱腰な男性編集者の善意につけて原稿を売り込もうとし、その原稿が到底出版できないとされると、損害賠償請求に訴えたと脅して謝罪の手紙と賠償金をせしめる、という物語である。編集者は自分が正しいと知りながらも、裁判沙汰を恐れる経営者の指示もあり、相手の言うなりにならざるを得ない。

ブランビー夫人という人物をこの連作集の最初の作品である「トルコ風呂」のモロイと比較すると、二人の性格はまったく異なるが、どちらも自分の書いたものが出

版に値すると信じ込む狂信性を持つ。それは執筆活動と自我や狂気との近接性を示すものである。二人とも自らの存在の基盤を書くことに置く。生きることがすなわち書くことと同義であるような生き方をしている。しかし、モロイが、文字通り紙とペンを使って物理的に書くことだけで満足しているのに対して、ブランビー夫人は出版されることでその原稿の価値を認められることを求める。それが自分の人格を認められることにつながるからである。「トルコ風呂」の末尾でモロイが支離滅裂な原稿を嬉々として書き続ける姿と、ブランビー夫人の悪意に満ちた自己中心性との対比は、書くという行為の喜びと呪縛という二つの側面を対照的に示していると思われる。この二つの短編が連作の冒頭と末尾に置かれた理由をそこに読み取りたい。

4 語り手「我々」の機能

連作集の最初の作品である「トルコ風呂」の冒頭で、語り手は以下のように宣言して読者を驚かせる。「これからお読みいただくちょっとした物語は、ある一人の人間の体験をつづったものだが、読者よ、私がこの「我々」という執筆上の自称を用いることを、どうか寛大にお許しいただきたい。そうしないことには、この話を語ること自体が困難になるからである」(3)。ではなぜ「我々」を使わないと「この話を語ること自体が困難になる」のか。彼は編集者としての職業柄、「我々」という自称を使って論説文を書くことに慣れているし、自分の身近に起こった出来事を語る際にも、それが自分の職業に関することだから、同じように「我々」を使って書きたいのだろうか。

そのそも「我々」という代名詞で語ることで、どのような効果が得られるのであろうか。一般的に言えば「我々」とは公式的、概念的な語り主体である。「我々」はその基盤として、共通理解をもつ集団、つまり雑誌や新聞の編集部などの権威ある集団の存在が前提となる。この種の文章の筆者はあくまでそうした集団の権威を代表し、いわば集団に隠れて匿名で発言し、そこには個人的感情や個性が入り込む余地はない。

この連作の語り手は、仕事の面では職務に熱心な責任感の強い人物で、自分の任されている雑誌の質を落とすわけにはいかないと寄稿者の原稿を厳しく判断しボツにする。それは彼の使う公式的権威的な一人称複数形代名詞に象徴される側面である。だが、この連作は全体

の調子としては、とぼけてユーモラスで軽い皮肉をこめたものである。そちらには語り手編集者の、お人よしで小心かつ平凡な血の通った一人の人間であるという側面が大きく寄与している。そうした多層性がこの作品集に生真面目さと哀愁の交じり合った絶妙のトーンを与えている。

また「バンジャンドラム」では、語り手はこれは自分がまだ編集者になっていなかった頃の話だとして、「偉大なる「我々」はまだ使えなかった [中略] それゆえ、我々はここではごく普通の人のように、一人称単数形で語ることにする」(147)と語る。これもこの作品集の多層性を示すとともに、「我々」という一人称の使用がいかに意図的であるかを示す。さらに、作品集全体の語り手が果たして本当に同一人物であるかという点などについては、ヘラー＝ラベル Heller-LaBelle が詳しく分析している。

5 「書くこと」の魔力

編集者が語り手であることを、創作という行為との関係で読み解くことも可能であろう。編集者は作家の原稿の最初の読者であり、その出版の可否を決定するのも編集者である。彼は執筆という創造の場に立ち会うことを第一の職務としている、創作者と読者との中間に位置する存在である。編集者という特殊な語り手が設定されていることで、読者は語り手とともに、テキストの誕生(あるいは多くの場合は誕生の失敗)の場に立ち会うことになる。そうした、テキストの誕生あるいは誕生の失敗の場で、「我々」とは、作家と語り手の共謀行為を隠匿する代名詞である。作家は「書くこと」の魔力に囚われた人物たちを、編集者という装置を用いて対象から距離をとって描いてはいる。しかし実は「我々」という代名詞そのものがその語り手の裏側にまで膨張し、作家の存在をもその「我々」の一部として含んでいるのだ。その結果読者がそこに見るのは、作家トロロープが語り手と共謀して創作者や芸術家の狂気や極端な自己中心性を否定しながらも、なおかつそうした非社会的傾向に魅了され続ける姿である。そしてその二人によって提示される、「書くこと」の魔力に囚われた人物たちの物語は、さらに読者をも「我々」の一部として吸収し、書くことと読むことの共犯関係となって拡大していくのだ。

こうして『ある編集者の物語』は、その人物像の多彩さ、作家の伝記的事実との関連、書くことの喜びと呪縛、

小説としての語りの装置の巧みさ、さらには創作活動そのものへの関心などの多くの点において、作家アントニー・トロロープの数多くの作品中でも特異な位置を占めるきわめて重要な連作短編集であると言える。

注

- 1) Betty Breyer, "introduction", *Anthony Trollope: the Complete Short Stories*, vol. 5, xvi.
- 2) John Sutherland, "short stories, Trollope's", *Oxford Reader's Companion to Trollope*, 489.
- 3) Stone, 1976, 30.
- 4) *An Autobiography*, Oxford ed. 337.
- 5) *An Autobiography*, 272.
- 6) *An Autobiography*, 121.
- 7) Shifrin, "Victorian Turkish baths" による。
- 8) *An Editor's Tales*, 47. 以下本書からの引用はカッコ内にページ数のみを示す。訳文は「トルコ風呂」は『電信局の娘 — アントニー・トロロープ短編集 I 』所収の拙訳を用い、他は試訳である。
- 9) Cooksey, 327.
- 10) トロロープ自身はこの部分を原稿には "an American woman" と書いた。しかし、遺言に従ってこの『自伝』が死後に出版されたとき、息子ヘンリーはそこを "a woman" と変えて出版した。それはケイト・フィールドという名前が知られることを避けたいという配慮だったようだが、結果的にかえって不要な憶測を招くこととなった。
- 11) *An Autobiography*, 316.
- 12) Mullen and Munson, 314. また、この小説家とアメリカ人女性との関係について、作品との関係を踏まえた考察は Hennessy, 214 - 223 に詳しい。
- 13) ちなみに、名前の類似（ポリーはジョージ・エリオットの本名マリアンの愛称でもある）などの点から、この作品はジョージ・エリオットとジョージ・ヘンリー・ルイスというカップルを念頭に置いて読めるとする指摘がある (Super, 271, Glendinning, 489-490 や Mullen and Munson, 251 など)。これに対してサザーランドは、『ミドルマーチ』の作者がこの作品中の作家志望者が書くような作品を書くはずがないと反論し、モデルはほかにいると指摘する (Sutherland, *Later Short Stories*, 585).

- 14) Mullen and Munson, 382.
- 15) *An Autobiography*, 337.
- 16) Cooksey, 329. また、Stone, 1976, 45 などを参照。
- 17) Sutherland, *Later Short Stories*, xvii.
- 18) Sutherland, *Later Short Stories*, xviii. ちなみに、トロロープは1841年に郵政省の仕事でアイルランドに派遣され、それが彼の人生の大きな転機となった。
- 19) Stone, 1983, 352.
- 20) Stone, 1983, 353.

参考文献

I. Primary Sources

- An Autobiography*. ed. David Skilton. London: Penguin Books, 1996.
- An Autobiography*. ed. Michael Sadleir and Frederick Page. Oxford: Oxford University Press, 1980.
- An Editor's Tales*. London: Penguin Books, 1993.
- Anthony Trollope: The Complete Short Stories. Vol.1, Editors and Writers*. ed. Betty Breyer. London: Pickering, 1990.
- Anthony Trollope: The Complete Short Stories. Vol. 2, The Christmas Stories*. ed. Betty Breyer. London: Pickering, 1990.
- Anthony Trollope: The Complete Short Stories. Vol.3, Tourists and Colonials*. ed. Betty Breyer. London: Pickering, 1991.
- Anthony Trollope: The Complete Short Stories. Vol.4, Courtship and Marriage*. ed. Betty Breyer. London: Pickering, 1991.
- Anthony Trollope: The Complete Short Stories. Vol.5, The Journey to Panama and Other Stories*. ed. Betty Breyer. London: Pickering, 1991.
- Anthony Trollope: The Complete Shorter Fiction*. ed. Julian Thompson. New York: Carroll and Graf, 1992.
- Early Short Stories*. ed. John Sutherland. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Later Short Stories*. ed. John Sutherland. Oxford:

Oxford University Press, 1995.

『電信局の娘——アントニー・トロロープ短編集Ⅰ』
都留信夫編 津久井良充編訳 鷹書房弓プレス
2004年

II. Secondary Sources

Cooksey, Thomas L. "Anthony Trollope". *British Short Fiction Writers, 1800-1880*. (Dictionary of Literary Biography, vol. 159). ed. John R. Greenfield. Detroit: Gale Research Inc., 1996.

Glendinning, Victoria. *Trollope*. London: Hutchinson, 1992.

Heller-LaBelle, Greg. "To Err is Human, To Edit Divine: Trollope's narrator in *An Editor's Tales* as Victorian arbiter". <http://www.fas.harvard.edu/~trollope/LaBelle-Heller_2005.doc>. 15 September 2007.

Hennessy, James Pope. *Anthony Trollope*. London: Jonathan Cape, 1971.

Mullen, Richard and James Munson, eds. *The Penguin Companion to Trollope*. London: Penguin, 1996.

Shifrin, Malcolm R. "Victorian Turkish baths". <www.victorianturkishbath.org>. 15 September 2007.

Stone, Donald D. "Trollope as a Short Story Writer". *Nineteenth-Century Fiction* 31. 1 (1976). 26-47.

_____. "Anthony Trollope: The Complete Short Stories.[…]" (review). *Nineteenth-Century Fiction* 38. 3 (1983). 351-353.

Super, R.H. *The Chronicler of Barsestshire: A Life of Anthony Trollope*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1988.

Terry, R. C. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. Oxford: Oxford University Press, 1999.

Summary

Anthony Trollope has been seen mainly as a novelist, and relatively little attention has been paid to him as a short story writer. It is worth remembering, however, that although he produced as many as 47 novels in his lifetime, Trollope also published 42 short stories as well. Many of Trollope's early short stories are by-products of his numerous business trips as a post office clerk, and they often have foreign characters in exotic situations. In his later years as a writer, however, his short stories became more diverse and sometimes included unusual characters and situations the writer could not utilise fully in his novels. As an editor of a modern collection of his short stories says, "the diversity and variety of Trollope's talents are nowhere more obvious than in his short stories."

An Editor's Tales is a collection of short stories published in 1870. It has six short stories that are closely connected through the existence of a narrator, a middle-aged editor of a London magazine. The tales describe his struggles to deal with a wide variety of would-be writers who want to publish their manuscripts. The narrator tells the stories using an editorial "we," instead of the usual "I." This narrative irregularity adds an unusual aspect to the stories by enabling the narrator to hide behind the plural pronoun, thus distancing himself from the tragi-comedies of the would-be authors, who are hopelessly caught between the pen and paper.

This paper reveals, through close analysis of the six stories, various aspects of the work: biographical interests, the joy and curse of creative writing, and subtle narrative methods. Finally, a coherent thematic structure is shown, which connects the six stories as a unified whole, and relates them to Trollope's dilemma as a creative writer.